

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

No 18
2023.12



Winter Wonderland

→ <https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

巻頭インタビュー：原島恒夫教授（筑波大学人間系障害科学域教授）

あなたには一つだけ恵まれた才能がある

本号では、人間系障害科学域教授の原島恒夫先生に APD についてお話を伺います。



先生のこれまでのご経歴を教えてください。

群馬県の生まれで、群馬大学教育学部で生物学を勉強して、県内の高校の理科の教員になるつもりでした。しかし、大学4年生のときに群馬県の教員採用試験を受けようとしたら、その年の高校理科の教員採用が1名で、しかも生物の枠は暫くは無いことがわかりました。そのため、その年は受験せずに、医学部で研究生をしながら、高校の非常勤講師をし、大学院の進学を目指すことにしました。志望大学院は筑波大学に決め、修士課程の視覚障害学で入学しました。当時、全盲や弱視のある友人もいて視覚障害学には馴染みがありました。

ところが、入学式のオリエンテーションの時に隣の席に居たのが、S君という聴覚障害のある学生でした。彼からチューターを依頼されてノートテイクをしているうちに、私もそのまま聴覚障害学を専攻することになりました。彼は現在、筑波技術大学の教授になっていますが、私と聴覚障害学を結びつける運命的な出会いでした。

大学院では博士課程に進まないかと仰ってくださいました先生がいました。一緒に日本のオーディオロジーをつくらないかという夢を語っていただきましたが、その言葉にほだされて進学を決めました。5年間で博士論文を書きましたが、しかし、当時は大学の就職がなく「埼玉県障害者リハビリテーションセンター」で働くことになりました。

言語聴覚士（ST）になったわけですが、その頃は、言語療法士などと呼ばれていました。聴覚障害児の早期発見・療育にも携わりました。当時、ABR検査は始まったばかりで、昔ながらの行動観察が主流でした。聴力検査や補聴器のフィッティング、プレイルームでお子さんの指導やお母さんの療育指導・カウン

セリングなども行いました。リハビリテーションセンターなので、肢体不自由、自閉症、知的障害、失語症、認知症の方などコミュニケーションに関わるあらゆる障害が対象でした。その後、東京学芸大学を経て筑波大学に移りました。附属聴覚特別支援学校の校長も経験しましたが、その時は楽しかったですね。

早速ですが APD についてお聞かせください。

博士論文を書いているときから、脳損傷が原因の聞き取りの問題など、APD (Auditory Processing disorder) の基礎研究をしていました。大学院の演習で、CAPD (Central auditory processing disorder) の英語版のテキストを読んでいましたが、それが研究のきっかけです。APD の特徴として、脳の聴覚野の損傷があるために、特に雑音があったりすると聞き取りにくくなることがあります。脳外科医から脳卒中で両側の聴覚野が損傷を受けている患者を紹介してもらい、それが博士論文の最初の症例研究となりました。聞こえないという自覚症状があるのですが、聴力検査をしてもあまり問題はなく軽度難聴程度でした。しかし、検査する度に聴力が変動し、雑音下で聞こえないという症状がありました。その後も、失語症など脳損傷者の症例を紹介してもらい、5年間で10例の症例研究を行いました。ただ、全部が APD ではありませんでした。ですから、私の博士論文は上位中枢聴覚経路や脳の損傷による聞こえについての症例研究と言ったほうがいいのかもかもしれません。

難聴と APD の違いについてですが、聴覚特別支援学校に在籍する子どもたちの多くは感音難聴で多くは内耳性難聴です。しかし、それ以外に、聴神経、脳幹、大脳半球などに障害があると聞こえにくくなります。それは、非常に複雑で、分かりにくい面があります。脳損傷性の APD の研究を続けてきましたが、実は APD の自覚症状を持ち相談に来られる方々の多くは、脳損傷性の APD ではありませんでした。

私の最初の博士論文指導学生が勤務する国際医療福祉大学の病院に聞こえにくさについての相談が多くあり、両耳分離聴検査や、脳波の検査と一緒にしましたが、脳の損傷によるものは殆どありませんでした。脳の損傷がなくて APD 的な症状がある場合、原因は別のところにあるのではないだろうかと考えています。ADHD や ASD の発達障害がある人も相談に来ていました。学業的には問題なく、

それを発見しなさい

大学まで卒業するのですが、就職すると症状が現れるケースがありました。電話業務とか、騒がしい職場とか、工場の騒音の中、保育園で子供たちと接する仕事をしている人たちとか、そういう成人の人たちの相談がありました。診断は受けていなくても、発達障害的な特性があるとか、あるいは、ワーキングメモリーとか、注意のコントロールがうまくいかないと、そういった認知的な処理がうまくいっていない方々が多いということがわかってきました。

APD は、海外では、医学的診断名のように扱われていますが原因は一つではありません。対処方法は同じ部分もありますが、原因はそれぞれで違います。現在は名称も、LiD (Listening difficulties) というようになっています。APD はもともと CAPD (central auditory processing disorder) とされていましたが、脳損傷のイメージが強くて、だから、LiD というのはその固定観念からちょっと乗り越えるための言葉です。聴き取り困難症というような。APD 研究の動向としては、アメリカでは中枢性聴覚障害を中心に考えられていますが、イギリスなどではもっと認知的な部分にも着目しています。認知的な原因を含めて考えると、発達障害の子供の聞き取り困難についても説明できます。

ドイツの学校も視察されていますが、APD に関連して特筆すべき状況はありましたか。

ミュンヘン大学では、聞こえに何か問題のある人を全て検査します。その中に APD 的な子供たちがいて、その子供たちは、聴覚障害学校に入ることができます。バイエルン州では、聾学校、難聴学校、聴覚障害学校の3種類の学校があります。聴覚活用が中心の子供の場合は、インクルーシブ教育の方向に進みます。人工内耳がどんどん普及して、補聴器の性能も向上し、聾学校の子供の数がどんどん減少しました。そのため、聴覚障害学校では半分くらい、聞こえる子供を入れるようになっていました。聞こえてはいますが、聞き取りや言語発達などにスペシャルニーズのある子供たちです。聞き取りとか言語教育にニーズのある子供たちを入学させます。聞こえる子供たちが特別支援、スペシャルニーズ学校に入り共生社会をつくるという形でした。

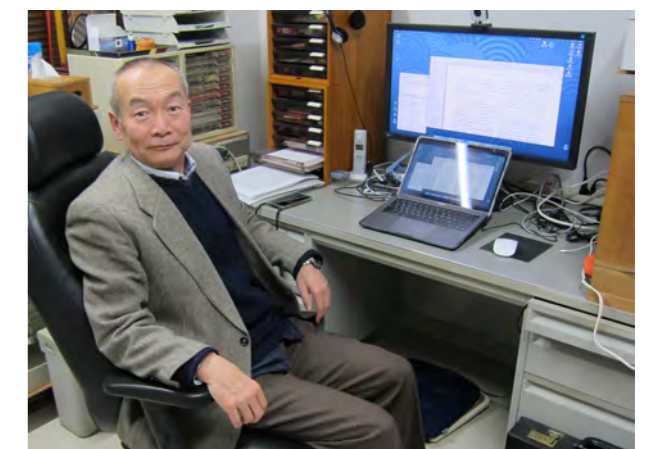
特別支援教育に携わる先生方へ一言お願いします。

私がなぜ生物の教員を目指したのかといえば、私が受けた生物の授業がとても良かったからです。担当の先生は実際のことをちゃんと見せてくれました

し、実験もあり本当に興味深い授業でした。そんな先生になりたいと思いました。教え方って大きいと思います。要点おさえた上での、量ではなくて質の高い教育です。附属特別支援学校の教育に通じるものがありますね。

特別支援教育は、海外では、修士に入ってから勉強します。特別支援教育は基本的にレベルの高い教育だと思います。教育の本質をきちんとおさえていて、なおかつ自分なりに工夫して発展させないといけない教育です。かなりの知識や技術、教養がないとできません。マニュアルではなく、自立した教育的な観点が必要になります。そのため、特別支援学校の先生方も大学院等で学ぶ機会を持ったほうがいいと思います。

最後になりますがもう一言だけ。ノーベル賞の受賞者にはユダヤ人がたくさんいますが、ユダヤ人の社会には、「あなたには一つだけ恵まれた才能がある、それを発見しなさい」と、そんな風に親が子に教える文化があるそうです。これは丸山工作という生化学者が書いていたと記憶しております。大学院生時代に読んだこの言葉はすごく印象に残りました。世の中には平均的に伸ばさないといけないという風潮（受験競争など）もありますが、考えてみたら、世の中を生き抜くには一つだけ秀でている力があれば何とかなるし偉業を成し遂げることもできます。そのような考え方が広まれば、障害のある子供たちも生きやすい世の中になるのではないかと考えています。



このインタビューは2023年12月に筑波大学の原島研究室で行われました。
(聞き手：連携推進グループ 稲本純子・橋本時浩)

著書の紹介

きこえているのにわからない APD [聴覚情報処理障害] の理解と支援 小淵千絵 (著, 編集), 原島恒夫 (著, 編集) 学苑社 2016/11/18

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取組がたくさんあります。

異なる見方や考え方を伝え合いながら、 より深く社会的事象を捉える力を育みたい

～附属桐が丘特別支援学校 本校中学部「社会科」の授業実践～授業者：中学部社会科担当 新 洋子先生

附属桐が丘特別支援学校（以下、「桐が丘」）には、肢体不自由の児童生徒が在籍しています。新先生は、本校の中学部で社会科を長く担当され、多くの生徒の指導に携わっています。社会科でつきたい力を見据えて、丁寧に工夫をしながら指導をされている新先生の授業をのぞいてみました。

秋の柔らかな日差しが差し込む中学部3年生の教室では、6名の生徒がそれぞれ机上のタブレット機器を操作し、国会の仕組みや役割について調べています。

新先生が、電子黒板に自作プリントのスライドを映し、「国会ではどのような法律を審議しているでしょうか。」と生徒たちに質問を投げかけます。さらに国会中継の様子を映しながら、「インターネットに関する法律が改正されたことは知っているかな?」と質問します。

生徒たちは「知っているよ。」「テレビで見たことがある。」などと言いながら、手元のタブレットで関連する法律を調べて画面上のプリントに入力します。調べたことについて、生徒同士で活発に意見を交わし合い、新先生は生徒たちの間を見回りながら必要な言葉をかけていきます。

生徒がタブレットを積極的に使って、すすんで授業を受けていますね。

はい。私の授業では電子黒板とタブレットを活用し、授業を進めています。教室前方の電子黒板で映しているデータを生徒のタブレットに共有しているため、生徒たちは画面上でプリントに書き込みができます。また、分からないことがあれば、その場でインターネットを検索して調べています。生徒同士が調べ方を



教え合う姿もみられます。桐が丘には、上肢操作に困難がある生徒も在籍していて、書字に時間がかかる場合がありますが、タブレットを活用することで負担が軽減できます。また、視覚認知障害による見えにくさのある生徒もいて、社会科でよく使用する地図や表、グラフの読み取りに困難を要する場合があります。解決策として、タブレットで拡大したり、自分で線や色をつけたりすることによって読み取りやすくすることができます。さらに、紙の教科書ではページをめくりにくい場合でも、デジタル教科書を併用することによってページをめくることがしやすくなります。

新先生は長く教鞭をとっていらっしゃるようですが、社会科のやりがいについて教えてください。

桐が丘の生徒たちは社会科が好きな生徒が多いと感じています。総合的な学習の時間であったり、校外学習であったり、積極的に社会に関わっていく姿勢が、学校生活全体を通じて培われているからだと感じています。社会科では、生徒たちの身近な社会の出来事を積極的に取り上げて、資料などをもとに自分の考え方を構築していきます。多様性の時代と言われている今、障害があるからこそ見える



世界があって、彼らの声が社会に届けば、もっと優しい社会になっていくのではないかと考えています。桐が丘を卒業した生徒が、社会の一員として活躍している姿を見ると、教員をしてよかったと感じます。

授業を見ていると、生徒同士がにぎやかに意見を交わし合っている様子が見られます。

授業で一つのテーマを提起してもさまざまな意見が出されるため、自分とは異なる考えや視点に気づく良さが生まれます。肢体不自由児を教育する特別支援学校の中には、一定の学習集団の確保が難しいため、社会科で培いたい思考力を育てるための多様な意見や考え方に接する機会が少ないという状況があるのではないのでしょうか。

このような悩みを解決するために、桐が丘では「遠隔授業マッチングサイト」を開設し、全国のさまざまな地域の学校とオンラインで遠隔授業を実施しています。教科の授業だけではなく、例えば「交流の幅を広げたい」「同世代の児童生徒が意見交換をする場がほしい」などを目的に、幅広い教育課程の授業を登録することができます。

社会科で遠隔合同授業を行った様子について、簡単に教えてください。

地理的分野で扱う「日本の諸地域」という単元を取り上げて、青森県、愛知県の特別支援学校と3校で実施したことがありました。

遠隔合同授業の中で、相手校との気候の違いや地域の課題の違いがあることを直接聞くことができ、教科書の中に書いてあることを想像するだけでなく、より現実感を持って、その土地に住む人々の生活に思い

を寄せることにつながりました。

今年は、東京都の公立中学校と「だれもが暮らしやすい街をつくろう」をテーマにして遠隔合同授業を行いました。生徒たちは写真や資料を用意しプレゼンテーションツールを用いてスライドをまとめて、相手校の生徒とオンラインでやりとりをしました。

生徒にとって伝えたい相手がいることで、よりすすんで比較・関連付けて物事を捉えたり、調べたりするという姿が見られたのではないかと考えています。これからも、社会科の深い学びを追求するために、生徒とともに自分自身も研鑽を積んでいきたいと思えます。



新先生の思いに応えるように、授業終了のチャイムが鳴るまで、熱心に意見を交わし合う生徒たちの姿が強く印象に残る授業でした。

インタビュー中に登場する「遠隔合同授業マッチングサイト」は、下記をご参照ください。

筑波大学附属桐が丘特別支援学校「遠隔合同授業マッチングサイト」

https://www.kiri-s.tsukuba.ac.jp/about_enkaku/

(聞き手：竹田 恵)

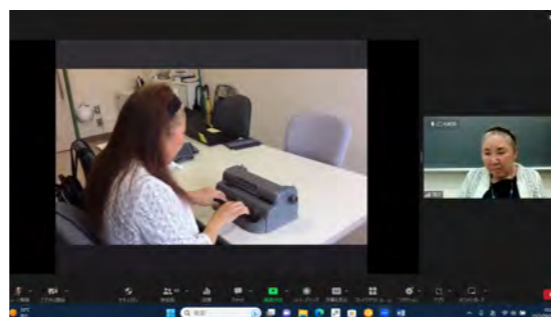
免許法認定公開講座について

本講座は、特別支援教育連携推進グループと学校教育局企画推進課が企画・運営を行い、筑波大学人間系（障害科学域）及び附属特別支援学校（視覚、聴覚、大塚、桐が丘、久里浜）と協力して、特別支援学校教諭免許状（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）の一種、二種免許状を取得するために必要な講座を提供しています。

今年度も感染症対策のため、Zoomによるオンライン（リアルタイム）で実施しました。7月24日（月）～8月5日（土）、第1欄から第3欄、全10講座（定員500名）を開講し、全国各地から387名の方々に受講していただきました。また、聴覚障害の方へは、情報保障として要約筆記を提供しました。

本講座の特色の一つである第2欄の「指導の実際」では、附属特別支援学校の教員が講師を務め、学校現場に即した視点で講義を行っており、多くの受講者から好評をいただいています。

今後も、全国の特別支援教育の資質向上のために、人間系（障害科学域）と5つの附属特別支援学校と協力しながら、筑波大学ならではの質の高い講座を提供してまいります。



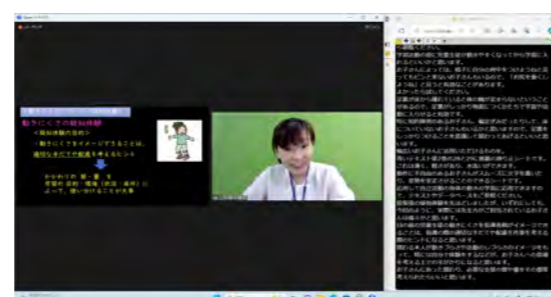
講義の様子（視覚障害の指導法・点字タイプライター）

公開講座「特別支援教育の教材・指導法の基礎」について

11月23日（祝）に筑波大学（東京キャンパス）において、令和5年度筑波大学（東京キャンパス）公開講座「特別支援教育の教材・指導法の基礎」をオンラインで実施しました。

北海道から沖縄まで全国の先生方53名が参加され、情報保障が必要な先生には、テキスト資料の配付とPC要約筆記での字幕の提示を行いました。

参加者からは「指導の参考になりました」「多くの学びを得られました」等の感想をいただきました。



講義の様子（動きにくさのある子どもへの教材・指導法）

令和5年度 現職教員研修について

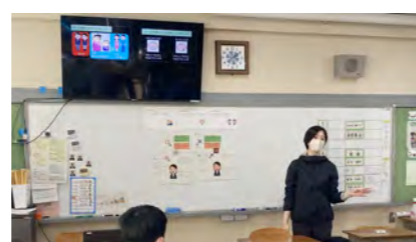
本研修は現場の幼児児童生徒や教職員との関わり、授業研究などを中心に進めていく点が大きな特徴です。今年度、研修に参加されていた3人の先生のうち、指導力向上研修（1か月）に参加されていた2人の先生の研修が終了しました。2人の先生は附属桐が丘特別支援学校と附属視覚特別支援学校で実習を行い、それぞれ、「障害の重い子供に対する自立活動の指導」、「児童生徒の発達段階に応じた歩行指導」をテーマに研究にも取り組まれました。また、専門性向上研修に参加されている先生は附属大塚特別支援学校で研究授業を行いました。



山崎先生（青森県から）の修了式



上原先生（熊本県から）の修了式



千葉先生（北海道から）の研究授業

JICA 2023 年度課題別研修 「インクルーシブ教育実践強化

～すべての子どもを支える授業づくり～ コース



講義の様子



発表の様子



8人の研修生をかこんで

11月29日（水）、コロンビア、ドミニカ共和国、グアテマラ、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ、ベリーズから、特別支援教育に携わる様々な職種の8人を迎えて授業づくりの講義・演習を行いました。

午前は、「授業づくり各障害種別の指導上の配慮と工夫」で視覚、聴覚、肢体不自由、自閉症についての講義、午後は「英語版 教材・指導法データベース」を用いた演習と教材づくり体験を行いました。様々な体験的な内容を取り入れて、理解を深めらるよう工夫しました。

令和5年度 特別支援教育セミナーについて

筑波大学附属特別支援学校
筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ共催

令和5年度第2回特別支援教育研究セミナー
インクルーシブ教育システム下で活用できる教材・指導法を考える
—特別支援学校の実践より—

視聴期間
2024.2.19(月)～3.19(火)

第1部 ワークショップ(対面) 先着30名
個に応じた分かりやすい指導内容や指導の工夫

第2部 オンデマンド配信
筑波大学附属特別支援学校の現場から

講師: 山田 毅 先生
(国士館大学非常勤講師、筑波大学附属視覚特別支援学校教諭)

理科(水のあたまり方観察カップ、雪の模型)
算数(白黒転写紙、ユニバーサル分度器)
社会(立体コピー地図)など、ユニバーサル教材の製作を体験できます。

日時
2024年2月23日
13:00～16:00
会場
筑波大学東京キャンパス文京校舎
122講義室

筑波大学特別支援教育連携推進グループ
(インターネットにて申し込みを受け付けます。)

受付: (第1部) URL: <https://forms.gle/WVLLu0G8E8U8AAU2>
受付: (第2部) URL: <https://forms.gle/W2ZALa0t4V4V4G8Y9K>
問い合わせ: snec@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

第2回セミナー - ポスター

昨年の11月に実施した、第1回の特別支援教育セミナーでは、全国から972人の参加がありました。盛会となりましたことに心から御礼申し上げます。

さて、引き続きまして今年度第2回の共催セミナーを開催します。教材作成ワークショップ(参集型)と附属学校教員による講義(オンデマンド型)に分かれての実施です。ワークショップの定員は30名ですでお早めにお申込みください。

テーマ
『インクルーシブ教育システム下で活用できる教材・指導法を考える』

○対面型ワークショップ
令和6年2月23日(金)
山田毅先生(元筑波大学附属視覚特別支援学校教諭・国土館大学非常勤講師)

○オンデマンド配信
令和6年2月19日(月)～3月19日(火)
筑波大学附属特別支援学校(視覚・聴覚・大塚・桐が丘・久里浜)の現場から
こちらからお申し込みください↓

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snec/>

editorial Postscript

編 集 後 記

共催セミナー、現職教員研修、公開講座、JICA 研修事業への参加、書籍発刊の準備と夏から秋にかけて多くの事業を展開してきました。

特別支援教育研究セミナーでは全国から 972 人の参加がありました。発達障害に対する関心度の高まりが感じられ、またアンケートには肯定的な感想が多数寄せられています。開催方法についてもオンデマンドによる配信が評価されていますので、次回からも引き続き同様の開催方法を検討して行きたいと考えています。受講していただきました皆様にはこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。

書籍第3巻も順調に編集作業が進められています。令和6年3月に、予定通り発行できる見通しが立っています。「教材・指導法データベース選集」の完結版となりますので、是非ご一読いただけますようお願いいたします。

本号では、筑波大学人間系障害科学域教授の原島恒夫先生に「APD」についてのお話を伺いました。研究で取り組まれた事柄の他にも、特別支援教育に携わる私たちに、子供たちと向き合う際の姿勢や態度についてたくさんの示唆をいただきました。

「あなたには一つだけ恵まれた才能がある。それを発見しなさい」

心にじんわりと沁みる言葉でした。原島先生ありがとうございました。

橋本時浩

表紙「Winter Wonderland」筑波大学附属学校教育局

SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット18号（通巻第66号）2023年12月25日発行
発行 / 編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938

e-mail：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2023 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）